

エッセイ

旅で笑顔に

戎谷 侑男



遠軽町丸瀬布の北海道遺産「森林鉄道蒸気機関車・雨宮21号」に乗って

人や車の往来する交差点に差しかかると思い出すのは、2001年のとある日、とある交差点で信号待ちをしていると反対側から手を振って近づいてきた男性のこと。Tフェリー会社のS支店長だ。彼は交差点の真ん中で、「太平洋上の初日の出ツアーを企画しないかい?」と大胆不敵な突然の発言。これは間違いなく面白い企画になると直感した。さっそく持ち帰り社内で大論争を繰り広げ、弊社の創立10周年記念事業企画として実施することになった。

その後、募集定員400名があつという間に満船となったのは言うまでもない。大晦日のお昼過ぎに出港、ドラの音が響く中ゆっくりと船体が動き出し、1泊2日の太平洋上初日の出フェリーの旅が始まった。船内では色々なアトラクションやイベントが披露され、夜は豪華なディナーや唄と演奏で愉しみ、ゲームをしながらカウントダウンパーティー。そして元旦は太平洋上から美しく輝く初日の出を見た。あの北の交差点でS支店長に出逢わなければ、

400名の笑顔は見られなかったと思う。

2002年頃から他社にない付加価値を重視した商品づくりを模索中、「北海道遺産」と遭遇して衝撃を受けた。「北海道遺産」の観光素材に刺激され、すぐに現地を視察して旅の企画に取り組んだ。「増毛の歴史的建造物と

留萌ニシン街道コース」で元漁師の語り部が浜言葉で伝えるユーモアいっぱいの解説、「空知地域の炭鉱関連施設群コース」で孫を連れて祖母が語る石炭のことや昔の暮らしぶりなど、現地に住む皆さんから聴く物語はすばらしい魅力に満ちあふれていた。「小樽みなと防波堤とウオール街コース」では地元のボランティアガイドが屋形船に乗って防波堤を見ながら、地域の特徴を一生懸命ご案内してくれた。どの企画もヒットしたのだが、いずれの場面も「人の力」が大切であり、話を聴いたお客さんは必ず笑顔になる。重要なことは、北海道で次の世代に引き継ぎたい歴史、文化、生活、産業などの宝物を地域がどう活用し、どう伝えられるかにかかっているのだ。

近年は新しい観光旅行時代に突入し、一人ひとりの価値感やニーズの多様化により団体旅行から個人旅行へ、周遊型から滞在型へ、名所旧跡見学から参加体験型へと旅行スタイルは変貌を遂げた。インターネット活用などにより旅行会社のカウンター来店客の減少が進み、旅の予約・申込・参加方法も大きく変わった。

また来日外国人観光客が2,000万人を越え、さらに勢いにのって3~5,000万人に達することが期待されている。LCC航空会社の運航便の増加、豪華客船の入港、北海道新幹線の開業などが続き、来道観光客の交通多様化の時代が到来している。その影響で、宿泊施設の不足をあちこちで耳にする。受入れ先の主要都市や空港周辺では新規ホテルの新設や増改築の話題が多く聞かれ、地方では民泊や個人型の簡易宿泊の活用など、あの手この手で知恵をしぼっている。

外国人観光客も団体旅行から個人旅行となり、レンタ



太平洋上の初日の出

カーを活用するようになった。外国人のレンタカー利用客は異常なほどの増加をみせ、搭載のカーナビも多言語で用意されている。外国人利用者から特に絶賛されているのは、渋滞が少なく延伸された高速道路と道幅が広く見通しも良い国道だ。世界中を探しても、北海道の道ほど整備が充分で、安全・安心に快適なドライブが楽しめる地域はない、といわれている。「道の駅」の充実や高速道路のサービスエリアやハイウェイオアシスなどの適正な配置も良い。

そこで、私たちは北海道の国道を観光素材として個性的な面白い旅行商品を企画した。

まずは国道275号を「歴史街道」として売り込み、空知地域を観光で盛り上げたいと月形町の櫻庭町長と意気投合。当別～月形～浦臼の国道誕生秘話と歴史を学ぶ企画を実施した。『町長がバスガイド』と新聞記事に掲載されると瞬時に満席とは驚きであった。確かに国道275号の歴史を語る櫻庭町長の話は面白いし内容もわかりやすく、通常のバスガイドも形無し(?)なほど。お客さんと町長の丁々発止のやりとりも面白く、皆さん破顔一笑だった。ふだん何気なく走っている国道にも様々なストーリーがあることを実感し、道の大切さをしみじみ学んだ。

それから、日高の国道235号には「アポイ岳ジオパーク」がある。様似町の坂下町長に、えりも～様似～浦河周遊の観光コースでバスガイドをお願いした。さすがにあらゆる分野のエキスパート、実に話術に長けていてユーモアも交える流暢な案内には小生も降参だった。さらに宿泊先のホテルで会食の際はなんと尺八持参で来ていただいた。名人であることは先刻承知の小生もビックリ。独奏かと思いきや江差追分を唄う女性客もあり、盛り上がりは想像を絶するほどで、もちろんお客さんは満面の笑顔であった。町の首長は観光の担い手の超目玉である。

また、これからの北海道観光を考えるには、どうしても先住民族のアイヌ文化と1万年以上も続いた縄文文化との関わりが欠かせないと思う。特に2020年、白老に完成予定の



上士幌町の北海道遺産「旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群」に歩くスキーで接近

「民族共生の象徴となる空間」(国立のアイヌ文化博物館〈仮称〉)については年間100万人動員するという目標があるらしい。しかし、それだけの来場者数を求めるには環境を整えないと厳しい。その対応策として、高速道路の一番近い箇所スマートIC(インターチェンジ)を新設して出入りを容易にし、入館証明書を受け取って再入場可能な方法はできないだろうか? JR白老駅に特急の停止を認めることも大事であろうし、乗車券を途中下車前途有効にするなどが必要だろう。

これから将来にわたって観光大改革の時代になるが、受入れ先としてホテルや貸切りバスを含めてハード面の充実がますます必要となる。そして、どこでもどんな時でも、



そのまちの担い手となるキーパーソンの存在が重要となる。

旅をする人たちも、地域に住む人たちも、皆さんが旅で笑顔になるために、これからも走り続けたいと思う。

北海道遺産「空知の炭鉱関連施設と生活文化」のひとつ、三笠市の「旧住友炭坑立坑櫓」を見学



「歴史街道」バスツアーに参加の皆さん。前列中央が月形町長

戒谷 侑男(えびすたに・ゆきお)

■プロフィール

1946年滝川市生まれ。64年に北海道中央バス(株)に入社し、深川、滝川、砂川、札幌の各事業所に勤務。91年より(株)シービーツアーズ開設から関わり、産業観光にいちはやく着目し、大人向けの工場見学ツアーや北海道遺産を活用した観光ツアーなど特色のあるツアーに積極的に取り組み、地域活性化に道内各地を奔走。2000年に常務、2007年に代表取締役社長となり現在に至る。NPO法人北海道遺産協議会理事、たきかわ観光協会副会長、北の縄文道民会議事務局次長。

